

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

——命題内容の成立・存在と命題の存在——

小坂 光一

0. 序

小坂(2002)などにおいて、「～ば」/「～たら(ば)」及び「～なら」を使った条件文の意味構造を次のように記述した。¹

- 1) 「S₁ば/たら(ば)S₂」の表面構造を持つ条件文の場合は、S₁の動詞句で表される事象/状態の「成立」(動的な動詞句の場合)もしくは事象/状態の「存在」(静的な動詞句の場合)がS₂で表される事象の成立もしくは状態の存在の条件となる。

(1) (彼は)明日来れば/来たら私に電話するだろう。

M[[[来る]のBZ(=「明日」)における「成立」]→[私に電話する]]

(MはSZにおける推量「だろう」。Mは一番外側に位置する)²

- 2) 「S₁(の)なら(ば)S₂」の表面構造を持つ条件文の場合は、S₁で表される命題(P₁)のSZ(発話時)における「存在」が、S₂に含まれるMの前提となる。

¹ 小坂(2002) S. 133, 136. なお、これの前段階において考察したものとして、小坂(1988¹)、小坂(1988²)及び小坂(1992)がある。

² 本稿で用いる略語は以下の通りである。

SZ=Sprechzeit、発話時
BZ=Betrachtzeit、被観察時
AZ=Aktzeit、行為時
EZ=Evaluationszeit、評価基準時
M=Modalität、モダリティ

なお、可能な場合には直後に日本語をカッコ書きする。また、条件と帰結の関係は「→」で示すことにする。「→」の左側が条件、右側が帰結である。これをことばで表せば「～ば」になる。

小坂光一

- (2) (彼は)明日来る(の)なら私に電話するだろう。
[[彼が明日来る] P_1 のSZにおける「存在」] \rightarrow M[私に電話する]
(MはSZにおける推量「だろう」。Mは「 \rightarrow 」の右側に位置する)

もっと公式化すれば、「 S_1 ば/たら(ば) S_2 」と「 S_1 (の)なら(ば) S_2 」の意味構造は次のようになる。

- (1) (彼は)明日来れば/来たら私に電話するだろう。
(1a) 推量[[彼が来る] P_1 ば[彼が私に電話する] P_2] P
M[$P_1 \rightarrow P_2$] P
- (2) (彼は)明日来る(の)なら私に電話するだろう。
(2a) [[彼が明日来る] P_1 のだ] S_1 ば[推量[彼が私に電話する] P_2] S_2
[P_1 のだ] \rightarrow [M[P_2]]

すなわち、「 S_1 ば/たら(ば) S_2 」の場合は[$P_1 \rightarrow P_2$]がさらに1つの命題となり、[$P_1 \rightarrow P_2$] P で表され得るのに反して、「 S_1 (の)なら(ば) S_2 」の場合は[P_1 の存在 \rightarrow M]の関係が生じるということになる。

しかし、「 S_1 (の)なら(ば) S_2 」から「の」が消えて、 S_1 の動詞句が「タ形」の場合、すなわち「～たなら(ば)」の形で用いられた場合は「～たら(ば)」と同じ環境での使用が可能になる(場合がある)ことが指摘された。³ 筆者は、「～たら(ば)」と同じ意味で「～たなら(ば)」を使用することには少しく抵抗を感じるが、しかし、現実にはこの用法は散見される。

- (3) もしも翼があったなら君のところへ飛んでいく。
(4) もしもピアノが弾けたなら 思いのすべてを歌にして きみに伝えることだろう
(作詞:阿久悠)
- (5) もしもステッキ^か掻い込んで 黒いかばんを持ったなら⁴ とても立派なお医者さん
ペンギン ペンギン かわいいな (作詞:重園よし雄)

³ 名嶋義直氏(東北大)の(口頭での)指摘。

⁴ この歌は某(製薬)会社のコマーシャル・ソングであるが、歌詞の2番以降の当該部分にもやはり「～たなら」が使用されている。

もしもタクトをふりながら 晴れの舞台に立ったなら(2番)
もしもサーカスにぎやかに 手品つかいをさせたなら(3番)

(6) K君が来たならこれを渡してくれ。

これらの「～たなら」は明らかに「～ば/たら(ば)」の意味で用いられている。

(3a) もしも翼があつたら(ば)

(4a) もしもピアノが弾けたら(ば)

(5a) もしもステッキ搔い込んで 黒いかばんを持ったら(ば)

(6a) K君が来たら(ば)

このような「～たなら(ば)」の使用が何故可能になるのであろうか。このあたりの意味構造をいくぶんなりとも明らかにすることが本稿の目的である。なお、「～ば」と「～たら(ば)」の関係については本稿では論じない。⁵ 本稿では「タ形」が用いられている「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」に焦点を当てる。

なお、「S₁」、「S₂」というのは久野(1973)で使用されている表現であるが、「前件」、「後件」とも概念が異なるし、「P₁」、「P₂」とも概念が異なる。これまでは筆者も折りに触れてこの表現を使用してきたし、本章でも使用しているが、定義が曖昧で不正確な記述になるので、今後は使用を避け、別の表現で代替することにする。

また、本稿では次の点を前提にして論を進める。

1. 動的(dynamisch)な動詞句は「動作・現象/状態」の「開始・発生/成立」を表す。
2. 静的(statisch)な動詞句は「動作・現象/状態/命題」の「存在」を表す。このうちで、「～のだ」は命題の存在を表す。

1. 「～(の)なら(ば)」と「～た(の)なら(ば)」

まず、「の」の挿入が可能な「～(の)なら(ば)」と「～た(の)なら(ば)」を観察してみる。これらは、これまで観察した限りでは、次の構造を持っている。両者の違いは「P₁の内部に『タ』が入っているか否か」である。

[P₁のだ]→[M[P₂]]

(1) 来るのなら電話ぐらいしろよ。

[来る]のだ→要求[電話する]

⁵ 「～ば」と「～たら(ば)」の関係については小坂(1988¹)、小坂(1988²)、小坂(1992)参照。

小坂光一

[来る]という命題(P₁)がSZ(発話時)において存在する→要求[電話する]

(2) 来たのなら電話ぐらいしろよ。

[来た]のだ→要求[電話する]

[来た]という命題(P₁)がSZ(発話時)において存在する→要求[電話する]

この場合は存在するものとして前提される命題の中味(命題内容)が異なる。従って、動詞句が動的(dynamisch)な場合は**両者の間に互換性はない**(statisch な場合については後述する)。

ただし、気になる点はある。それは

[P₁のだ]→[M[P₂]]

における M の位置である。次のような構造を持つ場合もあるように思われるからである。

M[[P₁のだ]→[P₂]]P

(1) 来るのなら電話ぐらいしろよ。

要求[[来る]のだ→[電話する]]

要求[[[来る]という命題(P₁)がSZ(発話時)において(聞き手側に)存在する]→[電話する]]

(2) 来たのなら電話ぐらいしろよ。

要求[[来た]のだ→[電話する]]

要求[[[来た]という命題(P₁)がSZ(発話時)において(聞き手側に)存在する]→[電話する]]

すなわち、

[[(聞き手が)来る]あるいは[(聞き手が)来た]という命題がSZにおいて存在する]→[[(聞き手が)私に電話する]ことを(話し手が聞き手に)要求する]

という解釈の他に、

[[(聞き手が)来る]あるいは[(聞き手が)来た]という命題が(聞き手側に)存在する]→「(聞き手が)私に電話する」ことを(話し手が聞き手に)要求する

という解釈も考えられるということである。

このように、「～(の)なら(ば)～」の構造として M[[P₁のだ]→[P₂]]も考えられるとすれ

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

ば、本稿のテーマである「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」の互換性を論じるのには非常に都合がいい(理由については後述する)。故に、これまでの主張を修正して、「～(の)なら(ば)～」の構造として次の2つを想定することにする。

～(の)なら(ば)～

- 1) $[P_1\text{の}だ] \rightarrow [M[P_2]]$
- 2) $M[[P_1\text{の}だ] \rightarrow [P_2]]_P$

2)の構造を持つ場合、「～たら(ば)」と「～た(の)なら(ば)」の違いは表面上は「『の]だ』の有無」だけとなる。

～たら(ば)～

- $$M[P_1 \rightarrow P_2]_P$$
- $$(M[[\text{命題内容の成立} \cdot \text{存在}] \rightarrow [\text{帰結の成立} \cdot \text{存在}]])$$

～た(の)なら(ば)～

- $$M[[P_1\text{の}だ] \rightarrow [P_2]]_P$$
- $$(M[[\text{成立した命題内容を有する命題の存在}] \rightarrow [\text{帰結の成立} \cdot \text{存在}]])$$

2. 「～た(の)なら(ば)」と「～たなら(ば)」

次に「～た(の)なら(ば)」と「～たなら(ば)」の関係を観察してみる。両者は前件の「なら」の前の部分にタ形が使用されている点が共通しており、タ形のうしろに「の」が使用可能であるか否かが外見上の相違点である。

- (1a) 彼が来た(の)ならこれを渡してくれ。
- (1b) *明日、彼が来た(の)ならこれを渡してくれ。
- (2a) 彼が来たならこれを渡してくれ。
- (2b) 明日、彼が来たならこれを渡してくれ。

(1a)と(2a)の前件で使われている「タ形」の意味は明らかに異なっている。(1a)では「タ形」を使用するためのEZ(評価基準時)がSZ(発話時)であるのに対して、(2a)では「タ形」使用のためのEZ(評価基準時)は「これを渡す」時点である。すなわち、(1a)の場合は「彼がすでに来た」という命題の(SZにおける)既存を前提にして「これを渡す」ことを(話し手が)要求しているか、あるいは、[[彼がすでに来た]という命題が(SZにおいて)

小坂光一

既存である場合にこれを渡す]ことを(話し手が)要求している(このように、「要求」という M の及ぶ範囲に関しては、すでに1.で述べたように、2通り考えられる)。従って、(1b)のように、「タ形」と矛盾関係にある BZ(被観察時)が設定された場合は許容されない。

一方、(2a)の場合は、「タ形」が用いられてはいるものの、[[彼が来る]が(SZ 以降において)成立した段階で[これを渡す]]ことを要求している。すなわち、(2a)の「タ形」は SZ(発話時)基準の「絶対過去」を意味しない。よって、「P₁たら(ば)」を使用した(3)との間に互換性が生じる。

(3) 彼が来たら(ば)これを渡してくれ。

(2a)のように SZ(発話時)基準でない場合は、(2b)のように SZ(発話時)以降であることを明示する BZ(被観察時)を設定した場合も許容可能となる。

(1a)と(2a)の違いはもう1つある。それは M の位置である。(2a)の M の位置は「～たら(ば)」の場合と同じで、[P₁+P₂]の全体に関係している。すなわち、M[P₁→P₂]_Pの構造を有している。M の時間は SZ(発話時)に限定されるから、[P₁→M[P₂]]はあり得ない。一方、(1a)の方は M[P₁→P₂]_Pの構造の他に[P₁→M[P₂]]の構造も考えられる。

これまで扱ってきた文では P₁の内部において動的(dynamisch)な動詞句が使われている。動的(dynamisch)な動詞句の場合、「～ている」を付加しない限り、命題内容の「存在」ではなく「成立」もしくは「発生」を表す。要するに「～たなら(ば)」の「タ」は命題内部に入っていると考えざるをえない。従って、「～たなら(ば)」の意味を一般化すれば次のようになることが予想される。

「～たなら(ば)」=「命題内容が成立し、『～た』という命題が存在する場合」

これを「来たなら(ば)」に当てはめれば次のようになる。

「来たなら(ば)」=「『来る』という事象が成立し、『来た』という命題が存在する場合」

「『来る』という事象が成立した」と「『来た』という命題が存在する」ことはイコールの関係にあるから、前半部分(「『来る』という事象が成立し」の部分)を省略して「『来た』という命題が存在する」という部分を表現するだけで事足りる。命題が「存在」する「時間」については次章で考察する。

ところが、静的(statisch)な動詞句の場合は少しく事情が異なる。次の文を見ていただきたい。

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

- (3) もしも翼があったなら、君のところへ飛んでいく。
- (4) 来年ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行くぞ。

(3)の「翼があったなら」の部分を次のように解釈することには無理がある。

*「翼があったなら(ば)」＝「『翼がある』という状態が成立し、『翼があった』という命題が存在する場合」

静的(statisch)な動詞句は、命題内容の「成立」ではなく、命題内容の「存在」を表す。従って、「静的な動詞句＋『～たなら(ば)』」の場合は「命題内容が存在し、命題が存在する場合」という解釈になる。この場合も、前半部分(「『翼がある』という命題内容が存在する」の部分)を省略し、「『翼がある』という命題が存在する場合」という部分を表現するだけで事足りるのであるが、問題は「あった」の中の「た」の取り扱いである。「『翼があった』という命題が存在する場合」という解釈は単純に受け入れられるものではない。これに関しては後述する。

3. 「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

すでに述べたように、動的(dynamisch)な動詞句の場合、「～た(の)なら(ば)」も「～たなら(ば)」も「『～た』という(成立した命題内容を有する)命題が存在する場合」というふうに公式化できると思われるが、「命題の存在」のBZ(被観察時)は明らかに異なる。

- (1) 彼が来た(の)なら(ば)これを渡してくれ。
- (2) 彼が来たなら(ば)これを渡してくれ。

どちらも「『彼が来た』という命題が存在する」ことが条件(前提)となっているが、(1)の場合、「命題の存在」のBZ(被観察時)、すなわち「～(の)だ」のBZ(被観察時)はSZ(発話時)である。

- (1a) [彼が来た]_{P1}がSZにおいて存在する→要求[これを(彼に)渡す]_{P2}
[彼が来た]_{P1}のだ→要求[これを(彼に)渡す]_{P2}

もしくは

- (1b) 要求[[彼が来た]_{P1}がSZにおいて存在する→[これを(彼に)渡す]_{P2}]
要求[[彼が来た]_{P1}のだ→[これを(彼に)渡す]_{P2}]

小坂光一

一方、(2)における「命題の存在」の BZ(被観察時)、すなわち、「～だ」の BZ(被観察時)は「これを渡す」時点であり、「命題(P₁)の存在」は要求の条件(前提)ではなく、「これを渡す」ための条件である。従って、「[[彼が来た]P₁が存在する場合に[これを(彼に)渡す]P₂]」ことを要求する」という解釈、すなわち、次の(2a)の解釈のみが可能となる。

- (2a) 要求[[彼が来た]P₁が存在する→[これを(彼に)渡す]P₂]
要求[[彼が来た]P₁のだ→[これを(彼に)渡す]P₂]

次の(3a)と比較してみればわかるように、(2a)は明らかに「S₁たら(ば)S₂」と類似した意味構造を有している。すなわち、Mが外側にある。「S₁たら(ば)S₂」と「S₁たなら(ば)S₂」の間に互換性が生じ(得)る理由の1つがここにあると思われる。

- (3) 彼が来たら(ば)これを渡してくれ。
(3a) 要求[[彼が来る]が成立する→[これを(彼に)渡す]]
要求[[彼が来る]→[これを(彼に)渡す]]

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」の間に互換性が生じ(得)るもう1つの理由は「成立」と「存在」の関係にあると思われる。すでに述べたように、P₁に使用されている動詞句が動的(dynamisch)な場合、「命題内容が成立した」ということは「成立した命題内容を持つ命題が存在する」ということでもある。上の例で言うならば、「『彼が来る』という命題内容(事象)が成立した」ということは「『彼が来た』という命題が存在する」ということである。従って、上記の(2a)と(3a)は実質的には同義となる。換言すれば(2)と(3)は同じ条件下で使用可能となる。

さらに、これは推測に過ぎないのであるが、「～た(の)なら(ば)」と「～たら(ば)」の間には互換性がないのに、「～たなら(ば)」を「～たら(ば)」の意味で使用してもあまり違和感が感じられないもう1つの理由として音声上の類似が考えられる。「～たなら(ば)」と「～たら(ば)」の違いは「な」の有無だけである。また、「ば」のない「～たなら」と「ば」のある「～たらば」は音声的な長さも同じである。特に歌において「～たなら」が用いられる最大の理由はこの辺にあるかもしれない。

4. 静的(statisch)な動詞句の場合

静的(statisch)な動詞句の場合は少く様相が異なる。M[P₁→P₂]_Pの意味構造を持つ「～たら(ば)」の場合、P₂の内容の成立・存在の条件となるのは「P₁で表される状態の

存在」であり、「P₁で表される状態の成立」ではない。また、M[P₁だ→P₂]_Pの意味構造を有する「～たなら(ば)」の場合、P₂の内容の成立・存在の条件となるのは命題 P₁の「存在」であるから、その命題 P₁を「タ形」で表す必要はないはずである。

- (1a) もしも翼があったなら、君のところへ飛んでいく。
[翼がある]という命題が存在する→君のところへ飛んでいく
- (2a) もしも翼があったら、君のところへ飛んでいく。
[翼がある]という状態(命題内容)が存在する→君のところへ飛んでいく
- (3a) 来年ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行くぞ。
[ウイーンへ行ける]という命題が(来年)存在する→コンサートに行く
- (4a) 来年ウイーンへ行けたら、絶対にコンサートに行くぞ。
[ウイーンへ行ける]という状態(命題内容)が(来年)存在する→コンサートに行く

(1a)や(3a)において、P₂の成立・存在の条件として存在すべき命題 P₁は「翼がある」、「ウイーンへ行ける」であって、「翼があった」や「ウイーンへ行けた」ではないはずである。従って、理論的には「～たなら」を使えば非許容文になるはずである。⁶

- (1b) もしも翼があるなら、君のところへ飛んでいく。
[翼がある]という命題が存在する→君のところへ飛んでいく
- (3b) 来年ウイーンへ行けるなら、絶対にコンサートに行くぞ。
[ウイーンへ行ける]という命題が(来年)存在する→コンサートに行く

然るに、「～たなら(ば)」が用いられても文は許容され(得)る。これは何故であろうか。

①説明1

我々は静的(statisch)な動詞句を点的・静的(punktuell-statisch)なものと線的・静的(durativ-statisch)なものに分類した。⁷

1) 点的・静的(punktuell-statisch):

BZ(被観察時)がSZ(発話時)に限定される場合(図1の t₁)は「非タ形」⁸で表されるが、「SZ(発話時)以前」から続いてSZ(発話時)に連続し、かつSZ(発話時)を含むBZ(被観察時)が設定された場合(図1の t₂)は「タ形」で表現される。t₁による表現は t₂を内包し、t₂

⁶ もう一つの解釈については後述する(「5.追記」参照)。

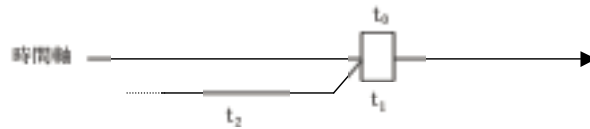
⁷ 詳しくは Kosaka(1991)、小坂(1992)、小坂(2002)など参照。

⁸ 「-u 形」、「-i 形」、「-da 形」を総称して「非タ形」と呼ぶことにする。

による表現は t_1 を内包する。従って、「 t_1+t_2 」は t_1 もしくは t_2 で表現される。

- (5a) 私はコーヒーが飲みたい。(t_1 を BZ とした表現)
- (5b) 私はさっきからコーヒーが飲みたかった。(t_2 を BZ とした表現)
- (5c) * 私はさっきからコーヒーが飲みたい。(* t_1+t_2 を BZ とした表現)

図1



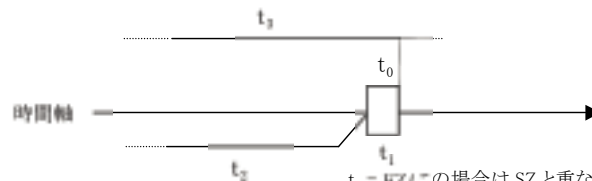
t_0 = EZ (この場合は SZ と重なる)
 t_1 = BZ 1 この中に状態 1 がある
 t_2 = BZ 2 この中に状態 2 がある
 状態 1 = 私はコーヒーが飲みたい
 状態 2 = 私はさっきからコーヒーが飲みたかった

2) 線的・静的 (durativ-statisch) :

BZ (被観察時) が SZ (発話時) に限定される場合(図2の t_1)は「非タ形」で表されるが、「SZ (発話時) 以前」から続いて SZ (発話時) に連続し、かつ SZ (発話時) を含む BZ (被観察時) が想定された場合(図2の t_3)は「非タ形」でも「タ形」でも表現することができる。 t_1 による表現は t_2 を内包し、 t_2 による表現は t_1 を内包する。従って、「 t_1+t_2 」は t_1 、 t_2 、及び t_3 の3通りの方法で表現可能となる。

- (6a) 彼はドイツ語ができる。(t_1 を BZ とした表現)
- (6b) 彼は以前からドイツ語ができた。(t_2 を BZ とした表現)
- (6c) 彼は以前からドイツ語ができる。(t_3 を BZ とした表現)

図2



t_0 = EZ (この場合は SZ と重なる)
 t_1 = BZ 1 この中に状態 1 がある
 t_2 = BZ 2 この中に状態 2 がある
 t_3 = BZ 3 この中に状態 3 がある
 状態 1 = 彼はドイツ語ができる
 状態 2 = 彼はドイツ語ができた
 状態 3 = 彼はドイツ語ができる

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

これは要するに、線的・静的(durativ-statisch)な動詞句の場合には、BZ(被観察時)が、SZ(発話時)以前から続いてSZ(発話時)に連続し、かつSZ(発話時)を含む場合は、「タ形」の使用が可能であることを意味する。この場合はEZ(評価基準時)がSZ(発話時)と重なるが、条件節の場合はEZ(評価基準時)がSZ(発話時)である場合(「P1のならば」)の他に、EZ(評価基準時)がSZ(発話時)以降である場合、すなわち、後件の命題内容P2が「成立」もしくは「存在」する時点がEZ(評価基準時)になる場合もある。例えば、「もしも翼があったなら、君のところへ飛んでいく」の場合は「飛んでいく」時点がEZ(評価基準時)になり(得)る。上記の論を当てはめるならば、「飛んでいく」時点で「翼がある」ということは「飛んでいく」時点に連続する「それ以前」においても「翼がある/あった」ことを意味する。これは『翼がある/あった』という命題が存在することでもあるから、『翼がある/あった』の『だ』ということにもなる。故に、命題内の動詞句が静的(statisch)な場合は「～ば」、「～たら(ば)」、「～なら(ば)」、「～たなら(ば)」が同じコンテキストのもとで使用可能になる。

もしも翼があれば、君のところへ飛んでいく。
もしも翼があったら(ば)、君のところへ飛んでいく。
もしも翼があるなら(ば)、君のところへ飛んでいく。
もしも翼があったなら(ば)、君のところへ飛んでいく。

②説明2

別の解釈の可能性も探ってみよう。それはすでに論じた「融合」という概念の応用である。「融合」にはいくつかの種類があるが、本稿で言う「融合」というのは命題内の動詞句が静的(statisch)である場合に、「～のだった」が「～た」になる現象のことである。⁹ 次の文を見ていただきたい。

(7) そう言えば、明日も会議があったよ。

この文の生成過程は以下のように考えられる。

[明日も会議がある]P(の)だった([明日も会議がある]という命題がSZ以前から存在し、SZにおいても存在する)
⇒明日も会議があるのだった

⁹ 「融合」に関しては小坂(1998)、小坂(2002)などを参照。

小坂光一

⇒明日も会議があった。

命題内の動詞句が動的 (dynamisch) な場合はこの「融合」が行われず、「～のだった」が表層に残る。

(8a) ああ、そうだ、明日東京へ行くんだった。

(8b) * ああ、そうだ、明日東京へ行った。

これを本章で論じている「～たなら(ば)」に当てはめてみよう。次の(1c)を例にする。

(1c) もしも翼があるのだったら、君のところへ飛んでいく。

「翼がある」は静的 (statisch) であり、「～のだった」は命題が EZ (評価基準時) 以前から存在し、EZ (評価基準時) においても存在することを表すから、上記の「融合」を適用すれば次のようになる。

(9) [翼がある]のだった ⇒ 翼があった

この場合の「融合」は命題の存在を表す「のだ」が表面から消えて命題内の「非タ形」と命題外の「タ形」がくっつくというものである。

さらに、表面的には「のだ」を残したまま「タ形」と「非タ形」が入れ替わっているように見える現象もある。

(10) [翼がある]のだった ⇒ [翼があった]のだ

「[翼がある]のだった」は「[翼がある]という命題が EZ (評価基準時) 以前から(少なくとも)EZ (評価基準時) までは連続して存在する」ことを意味する。また、「[翼があった]のだ」は「[翼がある]という状態が EZ (評価基準時) 以前から連続して存在し、EZ においても存在する」ことを命題化していると考えることができる。「[翼があった]のだ」には表面上は「のだ」が1つしかないが、「[翼がある]のだった」=「翼があった」だとすれば、「[翼があった]のだ」には2つの「のだ」が存在することになる。換言すれば、(10)における「～のだった」と「～たのだ」の関係は時称の単なる入れ替えではない。「～たのだ」は「～のだった」に「のだ」が追加された「～のだったのだ」である。

次も「のだ」の追加の例である。

(11) 何だ！おまえ、こんな所にいたのか。

[[こんな所にいる]のであった]のであるか

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

⇒[こんな所にいた]のであるか

⇒[こんな所にいた]のか

このような、「のだ」の追加は「否定」の場合にも見られる。

(12) 何故もっと早く来ないのだ。

この(12)の場合、「早く」は「来ない」を修飾しているのではなく、「来る」を修飾している。すなわち、ここでの否定は命題否定である。そして、「来るのでない」の部分が融合して「来ない」になり、その後に「のだ」が付加されている。

(12a) 何故[[もっと早く来る]のでない]のだ

さて、本題に戻ろう。「翼があるのだった」に(9)が適用されれば次の2つの条件文が生成される。

(13a) もしも翼があるのだったら、君のところへ飛んでいく。(「融合」前)

(2a) もしも翼があったら、君のところへ飛んでいく。(「融合」後)

「翼があるのだった」に(10)が適用されれば次の2つの条件文が生成される。

(13a) もしも翼があるのだったら、君のところへ飛んでいく

(13b) もしも翼があったのなら、君のところへ飛んでいく。(「融合」と「『のだ』の追加」)

(13b)から「の」が削除されて(1a)が生成される。

(1a) もしも翼があったなら、君のところへ飛んでいく。

しかし、ここで扱っているのは、「[～のだった] ⇒ [～たのだ]」の単なる「交替」ではなく、「融合+追加」であるから、「融合」そのものが不可能な動的(dynamisch)な動詞句には当てはまらない。

明日東京へ行くのだった ≠ *明日東京へ行ったのだ

動的(dynamisch)な動詞句と静的(statisch)な動詞句を全く別扱いするなら話は別だが、両者に共通した解決方法を求めるならば説明1の方が適切であろうと思われる。説明1を使えば、P1の動詞句が動的(dynamisch)であれ、静的(statisch)であれ、次のように一般化できよう。

小坂光一

- 1) 「～たならば」は「～た」という命題の EZ(評価基準時)における存在を条件とする条件節であり、その「存在」の EZ(評価基準時)は後件内の命題内容の成立時もしくは存在時である。
- 2) 「～た(の)ならば」は「～た」という命題の EZ(評価基準時)における存在を条件とする条件節であり、その「存在」の EZ(評価基準時)は SZ(発話時)である。

とまれ、説明1をとるにしろ、説明2をとるにしろ、何故「の」が削除されるかという点については説明が必要である。

「～た(の)ならば」は「～たのだ」の仮定形である。「～たのだ」は「～た」という命題の既存性を表すから、「タ形」を選択するための EZ(評価基準時)は SZ(発話時)である。すなわち、一番内部にあると考えられるもとの命題自体が「タ形」である。然るに、「～たならば」の「～た」は後件の命題 P₂の成立時点もしくは存在時を EZ(評価基準時)としており、その EZ(評価基準時)から見れば「タ形」が可能になるものの、SZ(発話時)を EZ(評価基準時)にする限りにおいては「タ形」にならないはずである。「の」が入ることにより、「の」の前の連体形の部分が既存の命題であることが顕在化する。そのために、「タ形」が SZ(発話時)基準で選択されたものでない場合、すなわち、命題 P₁が SZ(発話時)において既存であることを前提しない場合には「の」が無くなるのではないかと考えられる。

以上はさしあたりの見解である。

5. 追記

2つの点を追記しておきたい。

- (1) 来年ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行くぞ。
[ウイーンへ行ける]という状態が(来年)存在する→コンサートに行く

これは本稿で述べた説明では次のようになる

- (1a) [ウイーンへ行ける]という状態が「[コンサートに行く]時点を含み、かつ「来年」という Zeitintervall(時線)」内において(それ以前から連続して)存在する→コンサートに行く

もしくは

「～たら(ば)」と「～たなら(ば)」

- (1b) [[ウイーンへ行ける]という命題が「[コンサートに行く]時点を含み、かつ「来年」という Zeitintervall(時線)」内において(それ以前から連続して)存在する]のだから→コンサートに行く

本章で追記したいのはこれ以外のもう1つの解釈についてである。それは、統語論的な点は別として、「ウイーンへ行けた」は実用論的には「ウイーンへ行った」と同義で用いられることがあるということである。この場合は「行けた」=「行った」になるから、

- (1c) 来年ウイーンへ行ったなら、絶対にコンサートに行くぞ。
[ウイーンへ行く]という事象(命題内容)が成立し、[ウイーンへ行った]という命題が「[コンサートに行く]時点において存在する→コンサートに行く

のように解釈できる。すなわち、本来は静的(statisch)な動詞句「行ける」が動的(dynamisch)な動詞句「行く」の扱いを受けていると解釈できる。

追記したいもう1つの点は前件において明示された BZ(被観察時)ないしは EZ(評価基準時)に関してである。

- (1) 来年ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行くぞ。
(1c) 来年ウイーンへ行ったなら、絶対にコンサートに行くぞ。
(2) 明日彼が来たなら(ば)これを渡してくれ。
(3) 明日も会議があったなら、私は欠席するしかない。

これまで述べたように、前件の動詞句の時称(「タ形」)は後件の命題 P₂の成立時もしくは存在時を基準にして選択されている。しかし、「来年」、「明日」など、BZ(被観察時)ないしは EZ(評価基準時)を明示する語句は SZ(発話時)基準で選択されている。¹⁰ これらの時間をどう位置づけるべきか、これらの時間を BZ(被観察時)であると考えられるべきか、EZ(評価基準時)と捉えるべきかに関してはまだ考察の余地がある。第4章で述べた

¹⁰これらの語句が「前件+後件」全体の BZ(被観察時)を表すと考えれば、SZ(発話時)基準であることが簡単に説明できる場合もあるが、この考えは(3)には適用できないから、汎用性に欠ける。本文中の(3)を「これまでも会議があったら欠席してきたが、明日もそうするしかない」と解釈することも可能であるが、本稿で意図している意味とは異なる。

- (1d) 来年[ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行く]
(1e) 来年[ウイーンへ行ったなら、絶対にコンサートに行く]
(2a) 明日[彼が来たなら(ば)これを渡してくれ]
(3a) *明日も[会議があったなら、欠席するしかない]

「①説明1」を採用した場合、時間副詞の位置づけに関しては次にあげる3つの可能性(a、b、c)が考えられる。aは、これらの「時」が最内部の命題に含まれるという考え方である。bでは、これらの「時」はP1の「成立・既存」のBZ(被観察時)になる。この場合、「夕形」と共起することになるため、不自然な感じを与える。cの場合は、これらの「時」は「のだ」のBZ(被観察時)であるとともに、それよりも1段階内部の「成立・既存」のEZ(評価基準時)であるとみなすことができよう。本稿ではこれ以上立ち入らず、「①説明1」を採用した場合の解釈の可能性をあげるだけにとどめておきたい。残された問題は多々ある。

- (1) 来年ウイーンへ行けたなら、絶対にコンサートに行くぞ。
 - a [[来年ウイーンへ行ける]が既存]のだ+「ば」
 - b [来年[ウイーンへ行ける]が既存]のだ+「ば」
 - c 来年[[ウイーンへ行ける]が既存]のだ+「ば」
- (1c) 来年ウイーンへ行ったなら、絶対にコンサートに行くぞ。
 - a [[来年ウイーンへ行く]が成立した]のだ+「ば」
 - b [来年[ウイーンへ行く]が成立した]のだ+「ば」
 - c 来年[[ウイーンへ行く]が成立した]のだ+「ば」
- (2) 明日彼が来たなら(ば)これを渡してくれ。
 - a [[明日彼が来る]が成立した]のだ+「ば」
 - b [明日[彼が来る]が成立した]のだ+「ば」
 - c 明日[[彼が来る]が成立した]のだ+「ば」
- (3) 明日も会議があったなら、私は欠席するしかない。
 - a [[明日も会議がある]が既存]のだ+「ば」
 - b [明日も[会議がある]が既存]のだ+「ば」
 - c 明日も[[会議がある]が既存]のだ+「ば」

引用文献

- 久野 暉(1973): 『日本文法研究』、東京
- 小坂光一(1988¹): 「日本語とドイツ語における『条件文』(1)」、名古屋大学『言語文化論集』第9巻第2号
- 小坂光一(1988²): 「日本語とドイツ語における『条件文』(2)」、名古屋大学『言語文化論集』第10巻第1号
- Kosaka, K. (1990): „Konditionalsätze im Deutschen und im Japanischen“, in: Bahner, W. (Hrsg.): *Proceedings of the XIVth International Congress of Linguists II, Berlin-Ost*
- Kosaka, K. (1991): „Statische Verbalphrasen im Deutschen und im Japanischen“, in: *Akten des VIII. Kongresses der IVG, München*
- 小坂光一(1992): 『応用化学としての日独語対照研究』、東京
- 小坂光一(1998): 『『成立』と『存在』—『融合』に関する覚書—』、名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会編『ことばの科学』第11号
- Kosaka, K. (2002): „Entstehung eines Sachverhaltes und Existenz einer Proposition“, in: *Akten des X. Internationalen Germanistenkongresses Wien 2000, Band 2 (Jahrbuch für Internationake Germanistik, Reihe A/Band 54)*, Bern / Berlin / Bruxelles / Frankfurt am Main / New York / Oxford / Wien
- 小坂光一(2002): 『『成立』と『存在』—動詞句を中心とした日独語対照研究—』、東京

